

巻頭言

萎縮する建設投資の中での プロセス改善

照井進一



昨年の6月ごろ、山手線の電車の中で、モルガン・スタンレーにいる友人に何年か振りにばったり出会いました。久しぶりでしたので、品川駅のカフェで最近のお互いの近況について情報交換をしようということになりました。そこで驚いたことは、彼がすでにモルガン・スタンレーを退職したということ、その理由はやはり、アメリカのスブプライムの関係で、モルガン・スタンレーが日本における不動産証券事業を完全撤退したのだということでした。これまで、外資系のファンドが、リートという不動産証券手法を使ってわが国の住宅分野に大きな投資をしてきたことは、誰もが知っていることと思いますが、その話を聞いたとき、もしかしたら、サブプライム問題が日本の建設市場に大きな影響を与えるのではないかと、背筋が寒くなったのを覚えています。

その影響かどうかははっきり判りませんが、わが国の2007年度の建設投資は、とうとう50兆円を下回ってしまいました。この数値は、2007年度の統計ですから、サブプライムの影響かどうかは判りませんが、今年度以降は明らかにその影響が出てくる可能性が高いと思います。すでにこの影響で、株式の暴落、円高が進み、設備投資を控える企業も多くなると予想されます。それゆえに、わが国の建設投資がさらに悪化するとすれば、今以上に建設業の経営が苦しくなることが予想されます。

また、労働統計によれば、わが国の建設業が10年一日のごとく、労働生産性が変わらないという統計もあり、建設業は近代化を拒否してきたのではないかと

いう疑いも持たれています。

そこで、このような厳しい時代には、まず手がけなければならないのは、生産性の向上を他の一般的な製造業に一歩近づくことが必要ではないかと思うのです。つまり、従来から、建設業は受注産業であり、請負産業だから、生産性の向上は困難とされてきました。しかし、もうそんなことに甘えていることはできないのです。これでは、せっかく自社で開発した技術も使用する機会がありません。ここで重要なことは建設プロセスをどうやって改善するかということです。建設プロセスを改善して、安いコストで、短い時間で、高品質を可能にする方法はないのかを探っていかなければならないのです。タイム、クオリティ、コストによるプロセス改善が最重要課題と思われれます。もし、この3原則が同時達成されれば、建設事業の理想に近づくのではないかと考えられます。

初期の段階でコストを十分煮詰めることをせずに進めた事業は、必ずといって良いほど、設計のやり直しや、大幅な変更を余儀なくされます。これだけを考えても、無駄な時間が使われているのが一目瞭然です。このような無駄は、建設プロセスの中では至る所にあるのですが、特に予算、企画、設計の川上の各段階でも、時間をかけずに精度の高い事業の概算が可能であれば、この無駄の一部がなくなるのです。現在の建設プロセスでは、そのような技術が欠けており、当然教育さえなされていません。これからの世の中は、まさに不確実性の世界であり、建設業は、常に新しい時代に向けてさまざまな準備が必要に思われれます。

——てるい しんいち (社)公共建築協会——